

新しい時代における外国語教育の研究

Studies of Pedagogy of Foreign Languages in the New Era

総括研究員：七尾 誠

分担研究員：東 好男 中村茂裕 福田美智代 宮田 実

本研究グループは、教養部に所属する「言語文化科目」担当者で構成されている。本学においても、また全国の大学・短期大学においても、いわゆる外国語教育に関しては大幅なカリキュラムの組み替えが近年顕著である。しかしながら器の部分の改革は行われていても、内容面とくに「何を如何に教えるか」については掘り下げた理念なしに各教員が、いわばバラバラに教育に携わっているのが現状であると言わざるを得ない。この共同研究は、そのような現状を認識し、かつその現状打破にいくらかの貢献をはたそうという目的のもとに行われている。以下に列挙するのは、各研究員の平成7年度研究報告のレジュメである。

東 好男

新しい時代の英語教育の手法について、これまでの言語教育の現状調査と把握を通して、より具体的な側面を求めてきた。同時にマルチメディアによる英語教育の実践状況とその可能性についても調査を試みてきた。本学では新しいカリキュラムも発足し、言語文化教育の形を一新したことに間違いはないが、その中身についてはどうであろうか。本学学生の実感としての言語教育内容に対する感想、意見を今年は出来るだけ多様に把握したいと考えている。

実感できる語学学習とは一体何なのか。大学という場において、学生にその言語と文化を通じて何をどの様に教育すべきなのか。原点に戻って、素朴に、この命題をステップにして、新しい言語文化教育の理想手法を突き詰めていく年度にしたい。焦点を、異文化との接点・英語圏での文化研修、及びマルチメディア時代の英語教育、の両面に当てることで、そこから派生する言語文化教育の可能性をより実践的に具体化させていきたい。

七尾 誠

平成7年度も「フランス語教育を考えるつどい」の運営に携わり、新しい教材・教育法の研究、映画を使ったフランス文化教育の研究などを学外でおこなった。また、フランス文学会・フランス語教育学会において、いわゆる「マルチ・メディア」によるフランス語教育のさまざまな方法論に触れた。こういった教材は、機材の驚異的な進化すなわちハード面の進化の度合いにソフト側がまだまだ取り残されているというのが現状である。

次年度も同様なアプローチをおこなっていくつもりである。

福田 美智代

英語教育についてはそのあり方が論じられ、改善のための様々な提案がなされてきた。本学においても、新しいカリキュラムの導入に当たり、英語教育のあり方を再度問い直す機会になった。従来行われてきた、様々な教材を正確に解読し、知識・情報を取り入れ、あるいは、感性を養い育てるといった、どちらかといえば受動的な教育から、受け入れたものについて、それを検討したり分析しりして、それについての自分の考えをいかに他の人に伝えるかという訓練、つまり自己表現の出来る教育への転換が望まれているように思われる。知的理解や外国の文化・事情の吸収という教養面を土台にして、コミュニケーション能力の養成を目指す必要が今まで以上に求められていることを考慮して、より良い「英語教育のあり方」を考えていきたい。

宮田 実

今、日本の英語教育は大きな転換期を迎えている。文部省は公立の小学校における英語教育導入に向けて研究開発指定校を年々増やしている。この問題について、産大論集に「公立小学校における英語教育導入に関する一考察」というタイトルの研究論文を発表した。また、文部省は1989年に中学校と高等学校の学習指導要領を改訂した。中学校では1993年度から全面実施され、高等学校では1994年度から順次実施されている。この改訂で「外国語で積極的にコミュニケーションを計ろうとする態度を育てる」ことが強調され、高等学校では「オーラル・コミュニケーション」という科目が加わった。さらに、大学については、1991年の大学設置基準の大綱化を受けて、産大を含め全国の多くの大学でカリキュラム改革が進行中である。このような動向をふまえ、今年度も小学校から大学までの英語教育のあるべき姿についての考察を継続したい。